

多摩地区におけるアカハライモリの保全の取り組みについて

1. 都内のイモリの危機的な状況

アカハライモリ（以下、イモリ）は、本州・四国・九州に広く分布する両生類である。（写真－1）日本の固有種で、かつては田んぼや小川などの水辺でごく普通に見られた生き物であったが、都市開発による生息地の減少などにより、東京都のレッドリストでは絶滅危惧種に記載され、区部ではすでに絶滅しているかも知れない状況とされている。多摩地区にある保全地は、周囲が宅地化されて孤立した状態で、都心に最も近いイモリの生息場所のひとつである。建設局所管の都立動物園・水族園（上野動物園・多摩動物公園・葛西臨海水族園・井の頭自然文化園、以下「4園」という。）では、この場所が地域の人々にとって、イモリだけでなくさまざまな水辺の生き物と親しみ、共存できる場所として大きな潜在的価値をもつと考え、2002年から保全活動に取り組んでいる。



写真－1 アカハライモリ
名前の通り腹部に赤い模様がある

2. 保全地での取り組み

2. 1 環境の整備とイモリの調査

1999年に葛西臨海水族園で展示するために東京産のイモリを探し始め、2002年に見つけたのが今回報告の多摩地区の生息地である。当時、すでに生息するイモリの個体数は少なく、産卵できる水場はほとんどなかった。そこで、イモリが安定してくらしていける環境づくりを目的とし、人工池の整備を開始した。人工池は、防水シートを地中に埋め、雨水のみの供給で一年中干上がらない深さとし、保全地の様々な場所に大きさを変えて造成した。（写真－2）

また、イモリの生態や生息数の変化を知るための調査や、生息環境を維持するための池の泥上げや草刈りなどを、活動初期には年4回程、現在では年に2回程度行っている。



写真－2 造成した人工池

2. 2 地域との連携

単にイモリという特定の生物種を守るだけではなく、イモリがくらす環境そのものを守ることにつなげるため、地域や関係機関との連携も行っている。2010年には、当初活動を始めた保全地に隣接する都立公園内の谷戸田の一部を借り、新しい保全地として整備した。さらに、これらの保全地では、地域の小中学校と協力して体験学習を行っている。身近にイモリがくらす環境があることを生徒たちに誇らしく思ってもらい、後世に残したいと感じてもらえるよう、先生方と連携して学習のねらいや内容を設定している。

3. 動物園・水族園内での取り組み

3. 1 飼育と繁殖

東京都にくらすイモリの危機的な状況を鑑み、野外からの採集に頼らずにイモリを展示するため、飼育下での繁殖に取り組んだ。将来的に育成した個体を保全地に戻す可能性も考慮し、他の地域の個体とは交雑させないこととした。また遺伝的な偏りが起きないように、必要に応じて4園で飼育個体を交換している。

3. 2 情報発信

展示水槽周辺の解説パネル、企画展、講演会、パンフレットの配布を通じて、イモリをはじめとした水辺の生き物と環境との関わり、人間生活が身近な水辺環境に及ぼす影響とともに、豊かな水辺環境を残すために私たちにできることなどを伝えている。

4. さまざまな成果

保全地では2008年から現在まで、設置したすべての人工池でイモリの繁殖が確認されている。活動開始当初は推定100個体ほどで絶滅が心配されたが、これまでの活動により推定200～400個体が増え、今後も保全地のイモリを守っていくことに期待が持てるようになった。これらの活動で得られた科学的知見や活動概要などは、研究会や学会などで発表も行った。人工池にはイモリだけでなく、水生昆虫やカエルなど多くの生き物がみられ、地域の小中学校との体験学習においてイモリとその他の生き物、環境とのつながりを、実感をもって理解することにつながっている。(写真－3) また、これらの体験学習は、フィールドに接する機会がすくない子どもたちにとって貴重な機会となっていることが生徒の感想や先生からのヒアリングなどからも伺える。

園内では、飼育下で安定して繁殖ができるようになり、4園での展示を採集に頼らず維持できるようになった。これらの個体は、保全地に何かあったときのバックアップにもなる。



写真－3 体験学習の様子

5. 未来へつなぐために

都立動物園・水族園が業務として保全活動を行ってきた結果、多くの人が関わり、技術や理念の共有・継承を行って活動を続けることができた。そして今後も継続していきたいと考えている。しかし、保全地の土地管理上の問題が浮上し、自然環境を維持できるかの不確実性が懸念されている。人工池の整備や生態調査は今後も行っていく必要があるが、将来的には、地域の人々とともに保全地のイモリやそのほかの生き物たちを守っていく持続可能な活動を目指していきたい。そのためにも、西部公園緑地事務所や都立公園サービスセンター、谷戸田で活動するボランティアなど、関係機関との連携を強めるとともに、あらためてこの活動の価値や意義を多くの方と共有していく必要があると考えている。

※保全地の情報を守るため、都立公園名等、具体的名称は掲載していません。